論文審査の結果の要旨

Eating disorders among patients incarcerated only for repeated shoplifting: a retrospective quasi-case-control study in a medical prison in Japan

繰り返す万引きのみを判決理由に実刑になった摂食障害患者：
日本の医療刑務所における準症例対照研究

日本医科大学大学院医学研究科　精神・行動医学分野
研究生　　浅見　知邦

BMC Psychiatry 2012 14:169　doi: 10.1186/1471-244X-14-169.

万引きは摂食障害患者の重大な問題行動として知られているものの、これまでに実刑に至るほど万引きを繰り返す患者集団を対象とした研究はない。わが国の女性矯正施設では摂食障害患者の増加が問題となっており、服役理由の多くは万引きの累犯である。申請者は、医療刑務所において、10年以上にわたり万引きで服役となった摂食障害患者の治療に従事し、その経験から、摂食障害における万引きの臨床的意義を明らかにする目的で本研究を行った。

申請者は、2002年から2011年の八王子医療刑務所に移送された女性精神障害患者131名から、万引きで服役した摂食障害患者41名（以下、万引き群）と薬物関連犯罪で服役した摂食障害患者14名（薬物群）を抽出した。対照群は同年齢の摂食障害以外の精神障害患者32名とした。

調査の結果、万引き群では、薬物群と対照群に比べ、衝動的行動歴、非行歴、反社会的性質、境界性パーソナリティ障害の割合が有意に少なかった。万引き群には大学卒が7名おり、教育歴が長く、職業歴を持つ割合が高く、風俗業の経歴、反社会的人物との交際が少なかった。一方、万引き群では摂食障害歴の遷延化が顕著で、治療歴を持つ患者は他群より多いものの、精神科治療からの脱落率が高かった。収監時の体重は万引き群が、他の二群より軽かった。万引き群では強迫性障害、強迫性パーソナリティ障害の併発が高く、経過中、拒食、過剰運動、食事隠匿貯蔵,食事量のごまかしなどの行動が多く、逆に薬物要求、自傷行為が少なかった。

申請者は、以上の結果から、摂食障害患者による繰り返される万引きは衝動性や反社会性との関連は少なく、遷延重症化した摂食障害の精神病理に深く根差した症状としての行動であると結論した。そして万引きは衝動性や反社会性より摂食障害に関連する強迫性の増強に関連していると考察した。

本研究は、医療刑務所において多数例の摂食障害患者の万引きという問題行動を調査した世界で初めての研究として意義がある。さらに、従来、反社会的行動として見られていた摂食障害患者の万引きが、遷延重症化した摂食障害の精神病理に深く根差した症状であることを示したこと、さらには、摂食障害患者の万引きに対しては強制医療の適応があることを示唆した点も意義深い。

第二次審査においては、本研究の方法論から結果の解釈、摂食障害患者の万引きの現状、治療や予後などについて、多岐にわたる質疑が行われ、いずれに対しても適切な回答が得られた。

以上から、学位論文として価値あるものと認定した。